

コフロック

本社工場に生産拠点を集約、液体流量計増産体制築く、宇治田原工場は売却

流量計、各種ガス発生装置製造のコフロック（京都府京田辺市、小島眞理子社長）は、京都府の宇治田原町と京田辺市の2カ所に分かれていた生産拠点を京田辺の本社地区に集約、効率を高めることとした。宇治田原の11184㎡の土地と工場（8254㎡）は売却する。小島社長が「バブル期の贅沢な計画による広大な工場の維持には想像以上経費が嵩み、今後の修繕費は数千万円/年にもなる。2工場間を往復する時間的ロスも課題だった」と語るように、一時期収益拡大を牽引した同工場の維持が会社経営の大きな負担、収益体質の悪化を招いていた。「総投資額26億円と決して安い買い物ではなく、減損により条件のいい売却は望めないが、システム製品の成長が思惑通りでなかったこと、クリーンルームも老朽化が進んだことから、手放すことを考え始めた。幸い、3ヶ月ほど前に比較的好条件で購入を希望する会社が見つかり、思い切つて判断した」とする。



社長 小島眞理子 語る 経営方針

計の京田辺工場をリニューアルするとともに、08年に取得した隣接する3500㎡の土地に新たに新工場を建設する。建て床面積200坪に3〜4階建ての建屋を建設、1〜2フロアをクリーンルーム仕様とし、その一つは液体流量計の増産体制にも対応させる（詳細未定）。「成長分野として大きな需要が見込める液体の小流量域の精密計測・制御パーツの生産に向け、クリーンルームや最新設備を増強。半導体製造装置、生産設備、分析機器等の従来ユーザーだけでなく、内外におけるブランド力を活かし、製薬・食品・医療等へも攻勢をかけた」と意気込む。また、システム製品は横展開を意識しつつ生産体制を再構築する。投資金額は4〜5億円。建築着手は来春、夏、竣工は来年末の計画だ。それまでは売却済みの工場を賃貸する形で旧工場での生産を続ける。なお、同社は今回の工場売却による業績への影響はないとしている。

「会社の成長を考えて大きく投資したが、投資しても利益が出なければ意味がない。日本の製造業の将来を考えたら、現状の身の丈に合ったスリム化も必要。これにより、収益性が増し、経営体質は著しく改善が見込める」と、小島社長はまずは足下を堅めてから、理化学・分析分野での知名度を液体流量計を切口に半導体分野へも拡げ、屋台骨のフローパーツも改良・新製品の開発へと繋げたいと期待を込める。そして、次の投資

は、これらによる採算性を確認してからと経営方針を語った。